

「野鳥図鑑」：虎の巻

見つけるポイント

とりは飛(と)んでいり草(くさ)や木の中をチョコチョコ動いたり、なかなかはっきりとその姿(すがた)を見せることはありません。はじめのうちはむずかしいものです。

【家のまわり】

バードウォッチングを始(は)じめて、最初(さいしょ)は家のまわりです。家のまわりにはスズメ・ハト・カラスが多く見られますが、ちょっと注意して見みると、けっこう多くの種類の鳥がいることに気がつきます。スズメやカラスなどを、いつ・どこで見ても見分けられるようにすれば、より多くの鳥を知ることへ第一歩です。スズメやカラスを覚(おぼ)えれば似(に)た鳥がいても特徴(とくちょう)が分かり、その鳥の名前を知る手がかりになります。身近(みじか)な鳥を覚えてしまうことが、バードウォッチングを楽しむための第一歩(だいいっぱ)なのです。

【春の花】

サクラやウメなどの花の蜜(みつ)を吸う、メジロやヒヨドリなどが見られます。

秋の木の実(み)

カキなどの木の実を食べに、ムクドリやジョウビタキなどが来ます。

【高い所】

電線(でんせん)や屋根(やね)の上などの高く見晴(みは)らしがよいところには、鳥が好(この)んでとまります。

【空地】

空地(あきち)などでは、地面(じめん)で食べ物を探(さが)しているスズメやキジバトなどが見られます。

木の多い所

神社(じんじゃ)や寺(てら)、公園などの樹木の多い所にもたくさんいます。

【池、川】

冬にはカモなどの姿(すがた)が多く見られます。餌(えさ)を与(あた)える人も多いので、警戒心(けいかいしん)の強い鳥たちも比較的(ひかくてき)人に馴(な)れています。水鳥は大きな鳥が多く見つけやすいものです。

【山地】

春から夏にかけては、あちらこちらから鳥のさえずりが聞(き)こえてきますが、探すのは難しいですが、じっと見ていると姿(すがた)を目にすることができます。

【冬の林】

木の葉が落ちて見通(みとお)しがよくなり、鳥の姿を見つけやすくなります。バードウォッチングには最高(さいこう)の季節です。

【水場(みずば)】

湧(わ)き水や水たまりなどの水のある所には、一年を通していろいろな鳥たちが水を飲んだり水浴(みずあ)びをしにやって来ます。少し離(はな)れた所から静(しず)かに観察(かんさつ)すると、ジックリ鳥を見ることができます。

【草原・高原】

草原(そうげん)や高原(こうげん)は見通(みとお)しがよいので、簡単(かんたん)に鳥を見つけることができます。

春から夏にかけては、たくさんの花が咲(さ)き景色(けしき)も美しく、バードウォッチングに出かけるにはいい季節です。この時期(じき)、鳥たちは求愛(きゅうあい)やなわ張(ば)りを宣言(せんげん)するために目立つところでさえずっているため、見つけるのは簡単(かんたん)です。

冬には、小鳥などを狙(ねら)うタカやワシなどの猛(もう)きん類の姿が見られることがあります。空を見上げると、獲物(えもの)を狙(ねら)って上空を旋回(せんかい)しているかもしれません。

【千潟(ひがた)・海】

千潟(ひがた)は、年間を通してバードウォッチングを楽しめます。シギ類やチドリ類が訪(おとず)れる春と秋は一段(いちだん)と賑(にぎ)やかになります。

冬になるとたくさんのカモ類を見ることができます。

海・海岸・海の上での観察は、人間が隠(かく)れる場所も少ないので、遠くからの観察になります。フィールドスコープか双眼鏡(そうがんきょう)などを使っての観察しないと見えにくいでしょう。

【水辺】

年間を通して鳥の種類・数ともに多く、見通(みとお)しがよい場所が多いので、鳥を見つけやすいのです。最初は、水鳥に餌(えさ)を与えているところが多いので、カモ類、バン、カイツブリなどの水鳥のほか、小鳥類も人に馴(な)れている事が多いようです。間近(まじか)でとりを見るチャンスです。

春から夏にかけては、多くに鳥たちの繁殖(はんしょく)の場になっています。可愛(かわい)いヒナを連れた親子に出会うかもしれません。

秋から冬にかけては、鳥たちの種類・数とも一番多くなる時間です。猛(もう)きん類の姿も多くなってきます。

【バードウォッチング入門】

派手(はで)な色彩(しきさい)の野鳥でも、自然の中ではうまくカムフラージュされ、なかなか見つけにくい。野鳥との最初の出会いは、鳥たちの発(はっ)するささやき声のするほうをじっと探して、姿を見つけ出す。

姿を見つけたら、次は何の種類(しゅるい)かを「見分ける」。このデジタル図鑑には、約 100 種の野鳥が紹介(しょうかい)されている。(日本には、556 種(しゅ)の鳥がこれまでに記録(きろく)されています。)

【双眼鏡の使い方】

双眼鏡のピントを合わせには、中央にあるピンと調節(ちょうせつ)リングを回して合わせる C F 方式と、両側(りょうがわ)の接眼(せつがん)レンズをそれぞれ回して調節する I F 方式がある。ここでは野鳥観察で使われる C F 方式について説明します。

①まず両目の幅(はば)に接眼レンズの幅を合わせる。(うまく合うと、両目で見ても視野(しや)はひとつに重なり、円になる。)

②次に左目だけで、目標を見て、ピント調節リングを回してピントを合わせる。

③同じ目標を、こんどは右目だけで見て、接眼レンズについている視度調節リングを回してピントを合わせる。

双眼鏡で鳥を見つけ出すものではありません。肉眼で発見したものを双眼鏡で拡大(かくだい)してみるのです。発見したその視線(しせん)を動かさずに、手元を見ないで双眼鏡を目に当てる習慣をつけましょう。双眼鏡は 7～8 倍のものが便利です。

バードウォッチングは、季節、場所を問(と)わずいつもどこでも楽しむことができます。

これといった決まりもなく、気軽(きがる)に楽しむことができます。

必要(ひつよう)な最低限(さいていげん)のマナーを紹介(しょうかい)します。

【フィールドマナー】

フィールドマナーとは、鳥を観察する上での基本的(きほんてき)なルールのことです。

野草(やそう)などは採取(さいしゅ)はしない

道から外れない

田畑(あ)の近くで観察(くわんさつ)していて、つい夢中(むちゅう)になり、畑の中へ入って荒(あ)らしてしま

ったり、よその家の庭に入り込んでしまうことがあります。何も植えていない畑だと思っても、種(たね)や苗(なえ)が植えてあったりします。まわりに気をつけて観察しましょう。

動作(どうさ)はゆっくり静かに

鳥は人間の素早(すばや)い動きをととても嫌(いや)がります。警戒(けいかい)して姿を現してくれなくなります。できるだけ動作をゆっくりにして、大きな声や音を出さないように観察しましょう。

【巣(す)には近づかない】

卵を温めていたり、ヒナを育てている最中に巣に近づくと、親鳥が警戒して巣を放棄(ほうき)してしまうことがあります。巣を見つけても絶対に近づいてはいけません。

ゴミは必ず持ち帰る

一人一人が心掛けることで、きれいな自然環境(しぜんかんきょう)が残ります。

【双眼鏡(そうがんきょう)・フィールドスコープについて】

バードウォッチングをするとき双眼鏡(そうがんきょう)が必要(ひつよう)ということはありませんが、肉眼(にくがん)で警戒心(けいかいしん)の強い鳥を見るのはとてこ困難(こんなん)です。まず鳥がどこにいるのか、これから何をしようとしているのか肉眼で見極(みきわ)めてください。逃(に)げようとしていたらそのまま動かず、鳥が落ち着くのを待って、双眼鏡で見るとよいでしょう。

【双眼鏡の選び方】

双眼鏡には、7×35 や 10×50 といった数字が表示されています。10×50 を例にとると、10 は倍率で、百メートル先の物が約 10 メートルの距離(きょり)で見られるという計算になります。50 は対物レンズの口径(こうけい)をします。

口径が大きいほど明るく見えますが、そのぶん大きく、かつ重くなります。バードウォッチングには、7～9 倍、口径 30～35 ミリくらいの双眼鏡が便利(べんり)でしょう。

フィールドスコープの使い方

双眼鏡を使っても遠くてよく見えないときや、干潟(ひがた)や海、大きな湖沼(こしょう)などで観察するときに持っている则便利(べんり)です。倍率は 20～30 倍くらいのものが使いやすいでしょう。

フィールドスコープは三脚に据えて使うことにはなりますが、両方合わせると結構な重さになります。

以上、双眼鏡・フィールドスコープについて述べてみましたが、まずは肉眼でじっくり観察することが大切です。その後で双眼鏡を使い、フィールドスコープは双眼鏡を使いこなせるようになってからでも遅(おそ)くはありません。

【服装・持ち物・はき物】

観察用具の他に、準備するとよい物や、バーウォッチングに出かけるときの服装を紹介(しようかい)します。

【服装】

決まった服装はありません。動きやすいことが一番です。ただ、暑いときでも長袖(ながそで)や長ズボンを着用するようにしましょう。日焼けや虫刺(むしさ)され、草かぶれなどを予防(よぼう)することができます。

また、服の色は蛍光色(けいこうしょく)のものでなければよろしいです。

【持ち物】

観察をしている間は、いつでも両手(りょうて)がつかえるように、持ち物はザックに入れておきましょう。すぐに取り出したい物や小銭(こぜに)などは、ウエストポーチに入れておくと便利です。

天候(てんこう)によっては夏でも寒いときがあるので、うすでのジャンパーなどをザックの中に入れておくと役に立ちます。

また、女性の方は、日焼け止めとリップクリームは、年間(ねんかん)を通して持っているといいでしょう。

【はき物】

はき慣れたものが一番で、長時間歩いていても疲(つか)れず、歩くときにあまり音の出ないものがよいでしょう。近所の公園などはスニーカーで充分(じゅうぶん)です。水辺はぬかるみなどもあるので、長靴(ながぐつ)がいいでしょう。

【図鑑・フィールドノート】

鳥の種類を調べるには図鑑(ずかん)が必要です。種類がわかるとバードウォッチングへの興味(きょうみ)がましてきます。図鑑には、野外(やがい)の使用に適(てき)した物と、室内(しつない)に適した物の二つのタイプがあります。野外用は、小さく軽いことが第一条件(だいいちじょうけん)です。

フィールドノートとは、観察した鳥の種類や見た場所などを記録(きろく)するノートのことです。泣き声や特徴(とくちょう)など、直接識別(ちよくせつしきべつ)に関係のあることのほか、日時や天候(てんこう)なども記録しておくといいでしょう。